

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法（史的研究）

岡部 嘉幸

日本語の歴史において中世という時期は古代語から近代語への「転換期」として非常に重要である。今期は、この「転換期」としての中世における文法変化を真正面から取り上げた吉田永弘著『転換する日本語文法』（和泉書院、2019.2）が出版された。本書では、条件表現、可能表現、尊敬表現、断定表現を対象として、変化が生じた時期とその変化の過程を実証的に明らかにするとともに、なぜそのような変化が生じたのかという理由を「既実現/未実現」という観点から説明する。そこで示される論は個別の現象の説明として優れているだけでなく、古代語から近代語への変容の総体を考える上で参考になる。

3月に国立国語研究所が構築している「日本語歴史コーパス」(CHJ)へ「和歌集編」、「江戸時代編Ⅱ人情本」、「明治・大正編Ⅰ雑誌」、「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」が追加された。これにより、CHJは、ひとまず、奈良時代から近代までの資料を途切れることなく検索できるようになった。この画期的な出来事を喜びたい。今後、単なる用例検索のための利用に留まらない、コーパスならではの手法に基づく通時的研究が盛んになることを期待したい。

ところで、コーパスの利用が盛んになるにつれて、調査資料の標準化（コーパスにある資料だけが扱われること）が生じつつある。資料の標準化は研究者同士

が「同じ土俵」で議論ができるという点で有意義であるが、他方、調査資料の限定化を招いてしまう。この時代の言語資料として何がありえ、また、コーパスにおいて当該資料が選ばれている理由は何かというような「資料性」の問題について常に自覚的でありたい。その意味で『国語と国文学』令和元年五月号で「日本語史料と日本語史の研究」という特集が組まれたのはタイムリーである。犬飼隆「木簡を日本語史料として利用する」、木田章義「抄物研究の視点」をはじめとして「資料研究」の要点を知ることができる。

資料の標準化とは逆方向の動きとして、これまで活用されることの少なかった日本語史資料の「発掘」とその資料の日本語史上の位置づけの検討を行う論文集の刊行もあった。金澤裕之・矢島正浩編『SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究』（笠間書院、2019.8）である。本書では、明治後期から大正・昭和初期にかけての東京落語・上方落語の資料性が多角的に検討されている。その概要は、矢島正浩「なぜ落語資料なのか一序にきて」によって手際よくまとめられているが、SP盤落語資料が「近代話し言葉」資料として、また、「標準語」資料として、さらに、近世語（江戸語・上方語）から現代方言（東京語・関西方言）への文法変化に関わる「日本語史」資料や「方言」資料としても活用できることが、各論文によって、具体的に示される。このような新たな資料の「発掘」も重要だろう。

紙幅の関係で触れられなかったことも多い。諸賢のご海容を請う。

（千葉大学）

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法（現代）

須田 義治

井島正博「複文のテンス」(『日本語学論集第15号』)は、複文の従属節と主節の述語の両方にタがつくつかつかない場合、従属節は絶対テンスであり、そうでない場合は相対テンスであるとした三原健一「時制解釈と統語現象」(くろしお出版)の見解(「視点の原理」)を再検討し、三原が絶対テンスとしたタにも相対テンスを表す用法があるというように、二義的な場合の存在を指摘している。これは、三原が、文の意味を形態素が直接表すように、文における主節と従属節の時間関係を一般化したのに対して、井島は、従属節のテンスについて、単語と文の意味の階層性にもとづき、より精密な意味分析を行っていることに関係しているように思われる。

道法愛・白川博之「シナイの「未完了」用法について」(『広島大学日本語教育研究(29)』)は、アスペクトに関わるものであるが、シナイの「未完了」用法について、用例を示しながら先行研究を一つ一つていねいに批判し、自らの結論を導くという手堅い論を展開している。

近年『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を使った堅実な記述的研究が増えてきたが、南波千春「「おかしい」と「おかしな」」(『学習院大学大学院日本語日本文学(15)』)もそのようなものの一つと言えるだろう。先行研究において「おかしい」は「滑稽」という意味を表すことが多いが「おかしな」は「不審」という意味を表すことが多いとされているのに対

して、実際の使用例ではその差は見られなかったとするなど、コーパスを使った研究の特徴がよく生かされている。

野田尚史編『日本語と世界の言語のとりたて表現』(くろしお出版)は、さまざまな言語のとりたて表現について統一した理論的な枠組みによって見通しよく記述した論文集である。このような、とりたて表現に関する意味論的なカテゴリーにもとづいた対照研究は貴重な新しい試みであり、あとがきからは共同研究の楽しさも伝わってくる。また、最初に置かれた「とりたて表現の対照研究の方法」と「とりたて表現の研究動向」はとりたて研究一般にとって参考になるだろう。

澤田治美・仁田義雄・山梨正明編『場面と主体性・主観性』(ひつじ書房)という大部の論文集におさめられた宮崎和人「モダリティーの主観化について」は、シナキヤなどの省略形が、シナケレバイケナイなどの単なる文体的な変種でなく、〈評価性〉〈言い聞かせ〉などの独自の主観的な意味を発達させていることを明らかにした理論的な記述的研究である。また、森山卓郎「累加の接続詞とその論理」は「しかも、そればかりか、それに」などの累加を表す接続詞について、アドホック(臨時的)に設定される同類の「文脈的属性」を示すものと規定したうえで、分かりやすい作例を使った着想力豊かなテストによって、それぞれの接続詞の特徴を明らかにし、その分類を行っている。

以上、筆者の立場を反映した選択になっているかと思われるが、おもにテクスト論や文章論に関わるような文法の論文をいくつかあげ、簡単にその内容を紹介した。(大東文化大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(古典)

中村 成里

2019年の学界状況は、国語教育、とりわけ古典教育について話題沸騰した。2019年1月に行われたシンポジウム(於明星大学)をまとめた勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信 2019年9月)は、中等教育の現場における古典教育への現状が可視化され、存在意義を公の場で問われた出来事でもあり、「なぜ古典を勉強しなければいけないのか」という疑問を直截突きつけられる時代の到来を告げた転換点となろう。

さて、上代では、『万葉集』六五一、六五二番歌について、さほど顧みられてこなかった「露霜」の置く景の表現の検討をもとに、「露霜置きにけり」の景を「季節の推移ではなく時間の経緯を示す、男女の恋慕に関わる景」として位置づけた、井ノ口史氏「『家なる人も待ち恋ひぬらむ』——『万葉集』巻四、大伴坂上郎女の六五一番歌の解釈をめぐる——」『上代文学』(123号、2019年11月)、これまで議論の決着を見なかった「言向」を「言葉によって向ける(平定する)」意と改めて定義して、『古事記』における天孫降臨以前の「草木のさやぐ世界」すなわち「言語なき世界」を「平定し、秩序化する行為」と規定し、世界を支配するための言葉——表現が『古事記』の有する思想へと結びつく回路を論じた松田浩氏「『古事記』における「言向」の論理と思想」(『上代文学』123号、2019年11月)などがある。

中古・中世は、「ながむ」について、思

念や心のあり方を「見ること」によって把握し、この営為を象徴する語として捉える板野みずえ氏「新古今時代の和歌における「ながむ」」(『国語と国文学』通巻96、3号、2019年3月)、金源三説話にみられる「わがひのもと」を端緒として室町期歌学の様相へと論を展開していく館野文昭氏「「わがひのもと」という詞——金源三和歌説話を起点として室町期の歌学知を探る——」(『国語国文』通巻88、4号、2019年4月)、『源氏物語』の接頭辞「御」がどこまで係るのかという視点から、「御」の係る範囲の伸縮性を述べた鴻野知暁「接頭辞「御」の係る範囲について」(『むらさき』56輯、2019年12月)など、ユニークで意欲的なアプローチを試みる論文が散見される。

また、諸本の表現の差異と和歌の機能を述べた、松尾葦江氏「『平家物語』の表現——叙事に泣くということ——」(『和歌文学研究』118号、2019年6月)、「とか」「とかや」の文末表現から語感を捕捉していく野本東生氏「宇治拾遺物語への視覚——「とか」「とかや」をめぐる——」『国語と国文学』(通巻96、9号、2019年9月)もある。

古典文学における研究方法は、考証や文献学、また物語などの解釈に及ぶものなど多岐にわたるが、表現研究は独立して存在するものではなく、書誌学や作品の解釈にも有機的に結びついていることを改めて認識した。

最後に、上代から中古・中世を中心とした時評となったことをご寛恕願いたい次第である。

(明治大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

西尾 元伸

2019年の研究動向として、いくつかの取り組みや論考を紹介したい。

『日本近代文学』第101集(日本近代文学会、2019年11月)では、特集「近代文学研究における〈資料〉の可能性」が組まれた。そのなかで、渡部麻実「堀辰雄「(出帆)」と『萬葉集』——古の歌を歌うこと、あるいは防人歌を歌わない防人たち——」は、堀の晩年の小説草稿「(出帆)」が、『萬葉集』の取材やリルケの影響によるものであることを確認したうえで、「方法としての『萬葉集』」を問題とする。「(出帆)」では、歌から固有の背景を引き剥がすことが至るところで行われるという。そのようにして、作品内の古歌は集団的な共鳴を生起させるものとなっていく。渡部氏の論考は、『萬葉集』の古歌が引用され、新たな感情の表現として再構成されていく様相を明らかにしている。

須田千里「愚弄する美禰子——「三四郎」試論——」(『国語国文』第88巻8号、2019年8月)は、漱石『三四郎』を丁寧に読みなおし、ズーデルマン *The Undying Past* のヒロインであるフェリシタスや、イブセンのヘッダ・ガブラーが美禰子の造形に与えた影響から、美禰子の実像をとらえ作品を解説する。だが、美禰子は決して西洋文学のなかの女性そのままでなく、須田氏が「野々宮に求愛させるために美禰子にできたのは、三四郎を利用することくらいだった」と述べるように、当時の社会を生きるひとりの女性であった。須田氏の論考は、美禰子という

女性をはじめとする『三四郎』の表現が、漱石独自の創作であるとともに、その読書体験に左右されるものであることを示していよう。

『昭和文学研究』第78集(昭和文学会、2019年3月)では、特集「〈日本語文学〉の問題圏」が組まれた。〈日本語文学〉とは、「植民地やディアスポラの文学、さらには日本語を母語としない作家によって日本語で書かれた文学作品を指す」。「日本語」「日本文学」という枠組みを問い直す試みであった。ここでは、宮内淳子「『少女の友』に見る台湾表象——「新八景」シリーズに他者像を探す——」を紹介したい。1929.10～1930.12に『少女の友』に掲載された「新八景」シリーズ(日本各地をイラストと詩で紹介する)には、「北海道新八景」のような例外を除いて、少女たちの西洋への憧れが植民地や「内地」地方在住の少女を描く際にも一律に使われ、シリーズの日本像を平板にしていたという。それは、図らずも「植民地主義をひそかなぞるような身振り」であった。論考は幅広い問題圏を提起するものだが、いずれにせよ文学(あるいは絵画)表現に対する時代の制約は避け難いことが理解されよう。

いずれの論考も大変手間のかかる資料調査を基に論じられたものである。文学作品の表現が、どのように生成されるかについて示唆的であろう。

(帝塚山大学)

【表現学関連分野の研究動向】

国語科教育

渡部 洋一郎

2019年における国語科教育研究の動向について、表現に関連した研究と実践の両面から2つの学会誌を取り上げ、特徴的な論考を抜粋した上で、その要点を以下に示したい。

まず、全国大学国語教育学会による『国語科教育研究』では、第85集と86集において6本の研究論文とそれぞれ1本の実践論文、資料が掲載された。両集において特徴的だったことは、国語教育史的な観点からの論文が目立ったことである。例えば、第85集における「石森延男と第5期国定国語教科書—第二次世界大戦期における文部省への招聘理由と執筆教材」(宇賀神一)では、時代の要請に石森自身がどのように向き合い、合科主義に基づく教科書編纂や対外的な日本語普及のための教科書を作成したのか等が丹念な資料の読解に基づき、精緻に考察されている。また、同じく第85集の「吉田彌平読本にみられる書簡文教材の一考察—芳賀矢一読本との比較を通して—」(中嶋真弓)では、大正初期に発行された吉田彌平の高等女学校向けに編纂された読本の検討を通して、明治期から大正期、そして昭和に至る過程で主要な指導項目となっていた書簡文の教授が、実際はどのように展開されていたのかを詳らかにしている。いずれの論考も、従来必ずしも十二分に検討されてこなかった、大戦前後の混乱期における教科書編纂の実態や、大正期における女子教育の実態の一端を明らかにし得ている点で評価されよう。

また、86集では「漢字の学習方略の獲得を促す指導内容の検討—田中久直氏の漢字教育論を中心に—」(長岡由記)が注目される。ここでは、音訓や漢字の構造、漢字機能の理解と適用等が小学校の書写指導やローマ字指導とどう密接につながっているのかが田中が構築した学習システムに沿う形で丁寧に検討されている。実践にも示唆を与えるという点で興味深い論考であろう。

一方、日本国語教育学会による『月刊国語教育研究』では、No.564に「日本人学生と中国人学生の母語による意見文の構成の違い」(大野早苗)がある。日中の学習者に関する意見文構成の相違については、すでに日本語教育の分野でも研究の蓄積が見られるが、この論文は日中の学習者が同じテーマに基づく日本語表記の意見文を比較するのではなく、多文化間共修という観点から同一テーマについてそれぞれの母語で書かれた意見文を検討の材料としている。分析を通して、文字数・形式段落数・意見の配列順序・特定の要素の欠落等がデータとして示され、それぞれの国における教育の特徴を反映した結果となった。

また、No.566では、「児童作文における『理由述べ』表現の実態」(宮城信)があり、小学校の全学年を対象に「将来就きたい職業(ゆめ)」を課題とした産出作文の検討を行っている。論文では、理由が述べられるパターンにはどのようなバリエーションがあるのか、児童の作文に事実と理由の表現の不整が起こるのはなぜなのかを考察しており、国語教育の現場における混迷する理由付け指導の一端が垣間見え興味深い。(上越教育大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本語教育

塩入 すみ

本誌の日本語教育の研究動向は、これまで日本語教育と社会の関係に着目してきた(97,103,107,109号)。2019年は日本語教育推進法が施行され、政治・社会的情勢と研究・教育の関わりについて更に議論が進んだ。牲川波都季編『日本語教育はどこへ向かうのか 移民時代の政策を動かすために』(くろしお出版,2019)は、日本語教師の専門性と外国人受け入れ政策との関係を批判的に捉え、言語政策研究の方法論、「やさしい日本語」の意義等、政策に関わる研究・教育について具体的提言を行っている。

2019年日本語教育学会春季大会のテーマにおける「キャリア」という概念もこうした動向を反映し、就学や就労等の社会的意味だけでなく多様な環境下の個人のライフ、社会文化的な言語習得観も意味する。近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編『親と子をつなぐ継承語教育 日本・外国にルーツを持つ子ども』(くろしお出版,2019)は、国内外の複言語環境下の子どもたちの言語習得をバイリンガル・マルチリンガル発達理論の観点から捉え、動機づけ、アイデンティティ、指導に関する課題等を示すとともに、背景となる言語イデオロギーの問題も提起する。加賀美常美代『異文間葛藤と教育価値観 日本人教師と留学生の葛藤解決に向けた社会心理学的研究』(明石書店,2019)は、異文化適応の観点から個人の葛藤とその解決方略、教育価値観の関連を扱う社会心理学的実証研究で、

ビリーフや対日意識等、文化による価値観の違いと心理を扱う研究にも方法を示唆する。

言語教育の方法論の領域においても言語観の社会化とも言うべき変化が生じている。佐藤慎司編『コミュニケーションとは何か—ポスト・コミュニケーション・アプローチ』(くろしお出版,2019)は、言語教育実践者に対し、言語観・コミュニケーション観の再考、理論と実践の往還の再認識、そして学際的コミットメントを促す。ポスト・コミュニケーション・アプローチの指針、日本語教育のための応用言語学的視点、欧州評議会の言語教育政策の視点等の論考を集め、ポスト・メソッド時代の日本語教育・研究に、構築主義から批判的アプローチへの転換のための理論と実践例を示している。

最後に、言語の政策と教育に対し言語データ収集とデータベース構築の果たす役割について、野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育』(くろしお出版,2019)より、渋谷勝己「未来の研究に向けたデータ収集—第二言語習得・維持・摩滅の過程を解明するために—」を取り上げる。パラオの日本語変種の記録を通じ、習得・維持・摩滅の環境と過程をめぐる調査結果から、収集時点での目的が明確に決まっていなくても将来の研究を視野に入れてデータを蓄積することの重要性を論じている。第二言語能力の維持・摩滅の解明は、何を教えるべきかという目の前の問題に対しても、長期的視野に立った教育・政策的な計画の根拠を与えてくれるだろう。

(熊本学園大学)

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

住吉 誠

アメリカのメリアム＝ウェブスター社はtheyを2019年の単語(word of the year)に選んだ。近年のノンバイナリー(non-binary)の考え方を受け、そのような性自認を持つ人を指す単数代名詞のtheyの使用が増加したためである。メリアム＝ウェブスター社のホームページ上で検索できる辞書のtheyの項にはこの用法が掲載されている。また、同オンライン辞書にはMr./Ms.に代わるノンバイナリーのMx. という敬称も追加された。*Collins COBUILD English Usage* 第4版(2019)では、第3版(2011)にはないノンバイナリーのtheyの説明がAndy has invited us to their party. 等の例と共に追加された(p. 247)(このtheirはAndy'sのこと)。このような変化は、言語外的要因が英語の代名詞の体系に影響を与え始めたことを示す。同時に、規範の捉え方や文法的変異形をどう考えるべきかについて大きな示唆を与える。

近年、英語の規範事項を再調査する動きや規範文法を学術的に捉え直す潮流が見られる。I. Tiekens-Boon van Ostade, *Describing Prescriptivism* (2019, Routledge)は、規範文法の成立、英語語法書の歴史、規範事項に対する人々の意識変化などを捉え直した意欲的な書である。英語語法書に書かれている内容は自らの思想をどのような英語でどう表現すればよいかという問題の裏返しでもある。記述言語学の隆盛の一方で、出版される規範的語法書の数が増え続けている。

表現法がそのまま言語使用者の社会的バックグラウンドまでも判断される材料になる現状を考えれば、記述的な態度であるがままの言語表現を認めれば認めるほど、一般の言語使用者は「唯一の正解」を求めるという皮肉な状況が生まれる。どのようなアプローチで言語表現に迫るにせよ、本書は言語使用者と言語表現の関係を考え直す上で有益な一冊となる。

英語の表現を考える際、文法的変異(grammatical variation)は重要な意味を持つ。B. Aarts et al., *The Oxford Handbook of English Grammar* (2019, Oxford Univ. Press)は、英文法に関する研究の鳥瞰図的な情報を得ることのできる優れた書である。言語表現と関係するのはPart V 文法変異と変化である。

話し言葉、書き言葉といったジャンルが使用される表現方法と相関関係を持ち、ジャンル特有の文法を作っていくという議論は表現論の観点から興味深く、これまでの研究動向を概観できるという点で有益である(第30章)。また、言語表現との兼ね合いで興味深いのは文学作品の中に現れた文法的変異をまとめた第31章である。文学作品に使用される言語は、近年「民主化」の傾向が見られる。標準英語だけではなく、地域方言・社会方言も使用しながら作品を紡ぐ。文学作品をそのような言葉遣いで書くというのは、標準英語が確立してきた権威への挑戦であり、非標準的言語で書き手が思考をどのように表現するかという試みでもある。そのような非標準的変異形が文学作品にどのような効果を与えるかを学ぶことは表現論の観点から重要であろう。

(関西学院大学)

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

有菌 智美

2019年は、日本認知言語学会の設立20周年にあたり、第20回記念大会が開催された。またそれと連続して、我が国で初めて国際認知言語学会（第15回大会）が開催された。このことは、理論面の深化とそれを可能にする実証研究の興隆に支えられ、我が国においても認知言語学が着実に発展してきたことの表れであろう。さらにこのことを象徴するように、本年は、辻幸夫（主編）の『認知言語学大事典』（朝倉書房）が出版された。事典や概説書としては、辻幸夫（編）（2013）『新編認知言語学キーワード事典』（研究社）や、高橋英光・野村益寛・森雄一（編）（2018）『認知言語学とは何か—あの先生に聞いてみよう』（くろしお出版）などの良書が出版されているが、本書はさらに、第1章～第4章で、認知言語学の成立とこれまでの流れ、理論的枠組み、主要概念、理論的問題について、当該分野の第一線の研究者が最新の知見に基づき丁寧な解説を行っている。また第5章では、心理学、人類学、神経科学、脳機能計測、社会言語学、自然言語処理、手話などの他領域について、各領域から認知言語学が何を吸収するかという観点からだけでなく、それらの領域に対して認知言語学がどのように貢献するかどうかという観点でもまとめられている。

また、山梨正明（2019）『日・英語の発想と論理—認知モードの対照分析—』（開拓社）では、多様なスタイルとジャンルのテキストを対象とし、それらの形

式・意味・機能について、認知能力に基づく日・英語の発想の違いを明らかにしている。特に第6章では、翻訳プロセスにおける誤訳・難解訳の言語事例の比較を通して両言語の発想の違いを明らかにし、また文学作品における直訳的文体・翻訳的文体について考察し、それらを特徴付ける修辭的技巧についても論じている。このように翻訳に関わる認知プロセスおよびある種の文体を支える修辭的技巧を扱うことにより、文学言語に関連する諸分野（言語文化論、比較文体論、翻訳論等）へと新しい洞察をもたらす。

さらに、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として—」（2015年度から2017年度、研究代表者：森雄一）における研究成果がまとめられたのが、森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）（2019）の『認知言語学を紡ぐ』と『認知言語学を拓く』（くろしお出版）の二冊である。いずれも認知言語学のこれまでの研究成果を活かしつつ新たな展開を目指すものであり、特に『認知言語学を拓く』は、フィールド言語学（第1部）、中国語研究（第2部）、語用論（第3部）、言語変化（第4部）といった、認知言語学外部からの刺激を得て、認知言語学研究のさらなる展開に寄与するものである。

以上のように、2019年は今まで以上に外との接点を強くする動きが見られた。今後さらに学際的研究が重ねられることにより、認知言語学研究の根本を問い直すと同時に、認知言語学の新たな可能性が拓けることになろう。

（名古屋学院大学）

【表現学関連分野の研究動向】

修辞学

小松原 哲太

◆修辞学（レトリック）は、言語学、文学、心理学、コミュニケーション学など、多くの分野にまたがる学際的研究領域である。ここでは理論言語学の視点から、2019年の研究動向を紹介したい。◆実証的研究を行うためには、信頼できるデータが必要である。Marianna Bolognesi et al. (eds) (2019) *Metaphor and Metonymy in the Digital Age: Theory and Methods for Building Repositories of Figurative Language* には、国外のレトリックのデータベース構築プロジェクトと、その理論的・実際的問題点について論じる9本の論文が収録されている。なかでも、Eve Sweetserらによる *MetaNet*、Antonio Barcelona による *Córdoba Metonymy Database* が注目される。また、日本語のデータベースとして、筆者らは2019年に『日本語レトリックコーパス』のベータ版をウェブ上で公開した。◆語用論の領域では、「うそ」や「だまし」といった不誠実な言葉のレトリックを分析する、山本英一 (2019) 『ウソと欺瞞のレトリッカーボスト・トゥルース時代の語用論―』が注目される。レトリックをあつかう語用論としてまず思い浮かぶ関連性理論では、誠実な話者が、最小の労力で最大の効果を得るように解釈すると考える。しかし、不誠実な発話では、話者はメッセージを伝えようとはしていないし、むしろ相手に（自分にとっては好都合な）混乱を引き起こすことを狙っている。不誠

実なレトリックの濫用は、コミュニケーション研究の未開拓領域であり、本書はその研究の糸口を与えている。◆文法論と修辞学の接点を探求する試みとして、伊土耕平 (2019) 「文法と修辞のあいだ」『岡山大学国語研究』33: 1-14 は興味深い。修辞技法を4つに分類し、(A) 文法とは関係しないもの、(B) 文法の前で作用するもの、(C) 文法と修辞のどちらとも言えるもの、(D) 文法の後で作用するものを区別している。この論文では、修辞は思考内容、意味構造、文法構造、表現形式の諸側面で作用し得ると想定されている。この「修辞」の作用とは何であり、どのような体系と構造をもつのかという問題は、議論すべき論点として残る。◆認知言語学の領域では、Lorena Pérez-Hernández “XL burgers, shiny pizzas, and ascending drinks: Primary metaphors and conceptual interaction in fast food printed advertising” *Cognitive Linguistics* 30(3): 531-570 が挙げられる。ファーストフードの広告の視覚的レトリックを定量的に分析し、「プライマリーメタファー」(Grady 1997) が、商品についての肯定的な評価や感情を引き出していることを論証している。IMPORTANT IS BIG, GOOD IS BRIGHTなどのプライマリーメタファーは身体経験に由来しているため、異なる文化的・社会的背景をもつ人々に共通の理解を与える手段になるという指摘は重要である。◆以上のように、修辞現象はきわめて多面的で、研究成果の発表媒体も分散している。これらを総合的に議論する研究の場が待たれる。

(神戸大学)

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究

星野 祐子

文章・談話研究として、2019年に書籍として刊行された研究の動向を確認する。

飛田良文・佐藤武義編『シリーズく日本語の語彙』7 現代の語彙—男女平等の時代—(朝倉書店)では、文学作品、アニメ作品、流行歌・Jポップ、LINEなどが分析対象とされ、メディア特性を反映させた語彙のふるまいが論じられる。例えば、画面全体でメッセージのやりとりが表示されるLINEでは、話題の連続性が担保され、だからこそ「感動詞のみ、あるいは単語や句レベルの短さで、あるいはスタンプのみ」の返信が可能であるとする。また、アニメ作品を対象にした研究では「役割語」の観点が導入され、アニメの言葉の全体像を把握する方法が提案される。例として『千と千尋の神隠し』が取り上げられ、「物語の構造と登場人物の台詞が強く関連し合っている」ことが指摘される。

次に、現実世界にみられる「配慮」という観点から、以下の2冊を挙げる。山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』(くろしお出版)は、会話コーパスやwebページなどを資料に、引用表現、「全然」、「なんか」といった「配慮表現語彙」の機能を論じる。いずれの研究もポライトネス理論に基づくが、研究手法もデータもバラエティに富み、配慮表現研究の広がりと深まりが感じられる。なお、連絡ツールとして重用されるLINEは、ここでも分析対象となっている。分析観点は談話構造、コミュニケーション機能、機能的

要素であり、ロールプレイでなされた依頼トークの談話的特徴ならびに配慮的言語行動の実際が考察される。

続いて、庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編『くやさしい日本語』と多文化共生』(ココ出版)を取り上げる。同書では、様々な立場にある人への配慮といえる「やさしい日本語」の実践が論じられる。文章・談話レベルの研究では、NEWS WEB EASY、市が発行するリーフレット・公文書などが資料とされ、「やさしい日本語」のあり方が、非言語表現も含めた様々な観点から分析されている。

会話での非言語行動に注目した論考としては、安井永子・杉浦秀行・高梨克也編『指さしと相互行為』(ひつじ書房)が興味深い。同書は会話分析の観点から日常会話や何らかの活動を含む会話場面を対象に、会話参加者の相互行為における「指さし」の機能を論じる。発話、プロソディ、指さし以外の身体動作、物理的環境なども分析対象にした多角的なアプローチが複雑な言語行動の姿を描写する。

最後に、近代語の具体的な姿をとらえた研究として、高崎みどり編『大正期『中央公論』『婦人公論』の外来語研究—論と広告にみるグローバリゼーション』(富山房インターナショナル)を取り上げた。文章研究に関する論考には、「システム」「ジレンマ」「テーマ」といった外来語のテキスト構成機能を指摘する研究がある。また、抽象度の高い外来語が用いられることでの文体上の効果が指摘される。

本領域は、日々変化する「日本語」の実際の姿をとらえる領域である。分析ツールやコーパスの整備によりその深まりを期待したい。(十文字学園女子大学)